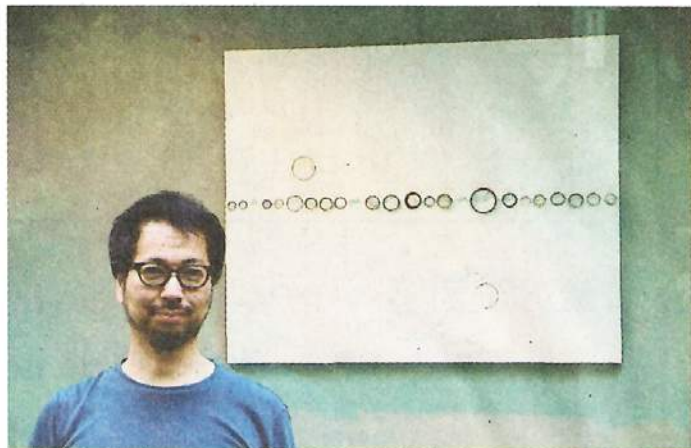


「記憶の想起」大切に

美術家 下城 賢一さん(44) = 熊本市

白い画面に溶けたろうそくが波打っている。真ん中に横一線に並べられたレンズの列。ギャラリーの外からウインドー越しに作品を眺めると、差し込む光できらきらと輝く。熊本市中央区の手取天満宮のそば、店舗やビルの並ぶ閑静な通りの一角だ。

レンズは社会の変化を映す人々の目。ろうそくは、感情や意識が積み重なってできる層



インスタレーション作品を展示している美術家の下城賢一さん = 熊本市中央区

をイメージした。「熊本地震で何げなく見ていた風景が変わるのを実感した。一瞬に、かけがえのなさやリアリティーを感じるようになった」という。

八代市出身。東京芸大に進学した当初は油彩画専攻だったが、在学中にインスタレーション（空間芸術）の制作を始めた。「作品の世界に入り込む体験ができる」。同大大学院修了後、ドイツに留学し、さらに学んだ。2006年に帰熊し、熊本市に拠点を置き制作を続ける。

大切にするのは、「作品を展示する場所の記憶を表現し、見た人の記憶も想起させる」こと。今回も会場周辺を何度も歩いて「光」や「神聖さ」を感じ、作品に込めたという。「インスタレーション作品を飾ると、空間の空気が変わる。スリリングな気持ちになるのが面白い。見て体験してほしい」

会場は「tetorigarden」。7点を展示、11日まで。
(中原功一朗)